

特250

811

NOUVEAUX COURS DES RELIGIONS JAPONAISES

神 社 と 郷 土 教 育

堀 江 秀 雄



東 方 書 院



始



特250
811

神社と郷土教育

堀江秀雄

目次

一、神社奉齋の意義……………一
二、氏子と氏神……………五
三、祭禮と情操教育……………九
四、祭神と道徳教育……………一三
五、學校教師と神社参拜……………一七
六、神官神職と郷土教育……………二〇
七、官吏公吏の敬神思想……………二三
八、神社分布と民心統一……………二五

神社と郷土教育

堀江 秀雄

一、神社奉齋の意義

日本民族における傳統の一大特徴——敬神は日本民族における傳統の一大特徴である。墳墓や山陵や兆域を廣大壯麗にして死者を弔ひ祖先を禮するが如きは、他の民族にも古くより行はれて居る事であるが、この神社を奉齋して神靈を祭祀すること我が日本の如きは、他に類例を見ない所である。我が國における神社の建設は、大國主神が御自ら靈魂奇魂を祀り給うたのが最初であるといふ。けれども、その時代の神社の宮殿が如何なる型式で建てられたものかは、詳しく知るに由ない所である。これに次いで建てられたものは、天孫瓊瓊杵尊が大國主神のために設けられた出雲の杵築神社で、今も頗る壯麗な宮殿であるのを見て、その大規模であつたことが想像せられる。それから後は漸次に神社の数が殖えて來たのである。

敬神の歴史的事實——神を敬ひ之を宮殿に齋きまつることは、神代の大昔から行はれた我が日本の歴史的事實である。その宮殿の構造と規模とは時と場合によつて相異なるものがあつたにせよ、神代このかた如何なる時代にも之

を廢した事はない。儒教や佛教など外國の思想文化が渡來しても、決して敬神の表徴たる神社を毀ち棄てるが如き反日本精神の行動に出でたことはない。奈良朝時代における佛寺の興隆は、攝津の住吉、越前の氣比、若狭の若狭彦、豊前の宇佐、常陸の鹿島、伊勢の大神宮、伊勢の多度、山城の八幡、近江の比叡などに神宮寺が設けられ、人をして目を眩らしめたであらうが、それでも延喜の御代における神名帳に記し置かれたる天神地祇の数は三千一百三十二座、神社の数は二千八百六十一座で、當時、帝都の宮中において、畿内・東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道において、よく分布的に鎮座せられてあつたのである。それより後、時勢に盛衰があつて、神社の興廢分合が行はれたけれども、明治維新このかた神祇の典禮も大に復古したのみならず、隆々たる盛運は斯の道の振興を現出し、大中小の官幣社國幣社及び別格官幣社・府社・縣社・郷社・村社の制を設けられて、敬神の國風は益々隆盛を見るに至つた。大正十二年の統計に徴すれば、大小神社の總数は十一萬四千八十四社を示して居る。また其處に奉仕して居る神官神職の總数は一萬四千五百九十人である。これみな國家若しくは町村の公的施設であり、紛ふ方なき歴史的事實である。

神社奉齋の宗教的意義——最初に神社を鎮齋したのが如何なる心もちであつたかは能く知り得る所ではない。しかしながら、それ／＼の地方における形勝な位置に、鬱蒼たる常磐樹の森林が高く聳えて居る處、これを遠く望んだだけでも、それに對して何となく幽邃さを感じ、森嚴さを感じ、おのづから敬虔の情が湧いて來るものである。漸く近づいて、その道の口なる鳥居を潜る時、その燈籠を見る時、その社殿の屋根を仰ぐ時、その青葉の間から吹き送る清鮮な風に胸裡の塵も拂はれて、神々しい威靈に接近するを覺えるのである。まして、自己の幸運を感謝する者、力の

不足を嘆く者、運命の拙きに泣く者、測り難い前途に不安を感じる者、前途の光明を求める者、過去の罪惡を悔いる者、人間以上の力を信ずる者など、いづれも衝動的に神威の前に頼づくのが常である。我が日本民族は原始このかた厚い宗教心に富んで居たもので、天地創造や、高天原や、國生みや、禊祓や、瑞珠盟約や、天の窟などの神話的傳説も、この宗教的情緒の産み出したものと思はれる。されば、祖先崇拜、英雄崇拜の如き道德的價值ある心理状態から出發した施設と思はれる神社は最初には殊に宗教的な重大意義を持つて居たものと思はれる。この神社の宗教的素質は、神社が純然たる道德的施設と見られる今日でも、幾分濃厚に保持せられて居るのは、言ふを待たない所である。

神社奉齋の道德的意義——神を認め神を崇めるといふことが、微妙な宗教的情緒から出發したものであるのは、否定しがたい所であるが、我が國今日の神社における祭神の如く、歴史的關係の密接な對象を祭祀し崇敬することは、その崇敬的態度を執る者の心理は判然としたものではないにしても、道德的意義を含んだ行爲と見るのが至當である。多くの大小神社の祭神は、我が國の建國時代このかた、その建國のために心を盡し身を苦しめて命をも惜しまなかつた獻身的功勞者であるが、その後の時代においても皇室の爲に國家の爲に社會の爲に犠牲的に立ち働いた大手柄者であると國民から尊信せられて居る。それ故に、神社は功勞ある英雄的人物を神として祭つて置く殿堂である。祭神の中には、一時的な、一地方的な事件の爲に身命を擲ちて顧みなかつた偉人が祭られて居るものもあるけれども、要するに國民道德實行の大立者が祭られて居るのである。

かゝる神社の祭神は、いづれも一般的國民に對して永久に模範を垂れるもので、かゝる神社には彼の淫祠的なものはない。かくの如き神社を奉齋する事は、國民の崇高な道德的情操の結晶としての現れである。かゝる神社を壯麗に

し、かゝる祭神の威徳を顯彰するのは、國民の道德的情操が益々熱誠であることを示し、なほ後世子孫に對して國民道德の實踐躬行を親切に獎勵する意味を含むものと解してよいのである。

國民道德的な情緒の衝動によつて奉齋せられたる神社には、ある局限せられた道德的意識が發露せられて居るやうにも思はれるけれども、我が國民道德の實踐者にして、苟も神社の祭神として祭られる程の者には、決して小乘的な利己主義者はない。それは必ず大乘的な道德的情操の所持者であつたらうことは疑を容れられないのである。これを國家の宗祀としての神社に祭祀することは、低級にして偏狹な道德的情操の衝動によるものとして排斥すべきではない。たゞ彼の全く功利的な情緒の衝動よりして祭られたる淫祠的殿堂は、たとひ殿堂その物は結構宏壯にして人目を眩するが如くであつても、崇高な道德的意義を含んで居るものでないことを知らなければならぬ。

神社奉齋の政治的意義——我が神社の奉齋せられる動機が、單に宗教的な意志にあるのみでなく、むしろ道德的情操に基くものであると信すべき理由があるとすれば、更にこれを擴大して政治的な意義を含んで居るものと觀ることは、決して無理な觀方ではない。最初に神社を奉齋せられた動機が如何なるところにあつたにせよ、その多くは國家のために社會のために活動した功勳ある人を祭祀したもので、これを久しい間國家の宗祀と觀られ、神社を崇敬することが國民道德の精神に適するやうに信ぜられるからは、神社奉齋に對する政治的意義は頗る濃厚であるものとせなければならぬ。かくの如く觀來る時は、神社が今日各地に奉齋せられて、その典禮が盛に行はれて居るのは、我が特殊な國情に由來するので、かの寺院や教會といふが如き宗教的殿堂の建設せられるのは大なる相異あることを知られるのである。

二、氏子と氏神

氏族の繁榮——人類が文化的に發達して來た過程中には、種々な事象を現して居るが、いづれの國民も「氏」といふものを有して居るが如きも。興味が多い一面である。「うち」といふ語は「うち」の轉訛したもので、「内」であり、「身内」の意義である。「身内」といふのは同じ血統の續いて居る間柄をあらはす語である。この同じ氏の者は同一地方に數多生ずるわけで、後には其の中の幾人かは他の地方にも移住することがある關係から、同じ身内でありながら各地にも知らぬ人が相生する道理である。上古の氏族制度が行はれて居た時代には、同一氏族の者は同一職業に従事し、また之を世襲したので、職業の名が氏族の稱となつた。我が國の上古における「氏」には、中臣・齋部・卜部・物部・服部・大伴・久米・鏡作・玉作などが著名なものである。後には職業的關係がなくつて、藤原・平・源・橘などの大氏族が出來、子孫が繁榮した。その氏族の多數なことを「八十氏」といひ、子孫の數多連綿たることを「八十連屬」といつた。長子を「子上」といふが如く、「氏の長」を「氏の上」とも「氏の長者」ともいつた。かくの如くして氏族は漸く繁榮して來たのであるが、その氏は多くは自家の祖先を祀り、これを宮殿に奉齋して、恭敬と感謝との禮を盡して居る。これが即ち「氏神」なのである。

氏神の歴史——氏が自家の祖神を祀つて居るのが「氏神」である。中臣氏が其の祖天兒屋根命を氏神とし、忌部氏が其の祖天太玉命を氏神として居たのなどは、適當な例である。ずつと後の世のことではあるけれども、貞丈雜記に「氏は氏の元祖神なり。藤原氏は天兒屋根命なり。平氏は桓武天皇を氏神とするなり。橘氏は敏達天皇を氏神とす。

源氏は清和天皇、嵯峨源氏は嵯峨天皇、村上源氏は村上天皇を氏神とするなり。」と記されて居るが如き、また例證とすべきである。さては、徳川氏は徳川家康を以て氏神とし、前田氏は前田利家を以て氏神とするにおいて、誰も異存はなかつたであらう。これらは祖神を以て氏神とする事例であるけれども、別に由緒ある神を氏神として世々崇敬することも多かつた。源氏の八幡宮における、平氏の平野神社における、藤原氏の春日神社における、橘氏の梅宮における、その血族的關係によつたものではない。蓋し敬神の事は必ずしも道德的意義に基くものではなく、宗教的意義に因ることも尠くないからである。

氏神と氏子——家々の祖先を奉齋して氏神と崇める場合においては、これを崇め尊ぶ子孫を總稱して氏子といふのが常である。これは第一義的のもので、氏子が祖先の恩徳を感謝する至情に出るのであるが、第二義的に威徳尊嚴な神靈を崇敬する場合は、同じく氏神と稱へ氏子と云ふとも、恩徳を感謝する情がないではないが、その神威の發現によつて擁護の徳を全うし、災禍を除き福を恵み賜ふやうに祈願する念慮を捧げ跪くに至るものである。この第二義的な場合は、主として宗教的情緒の衝動によつて起る行爲で、平生無事の時に絶えず此の衝動に刺戟せられるけれども、國家に事有る非常時などには、殊に此の意味における行爲に出られるのである。然しながら、我が日本の神に對する情念には、彼の未來世的な幸福を祈り、天國に歸遊しようと欲するが如き願望は含んで居ない。少しも利己的個人主義でないとは言ひ難いけれども、多くは對社會的對國家的な理想願望に基き、全く現世的である。

氏神と産土神——原始時代の部落が同じ血族の集團であることは、いづれの民族においても同じ状態であらう。それが人智の開け文化の進展するに隨つて情況が變遷して來るのは當然である。久しく氏族制度の行はれて居た我が日

本に於ける都市村落は、同一氏族の集團を以て生活の基本として居たが、そこには祖先を祀つてある所の神社を以て社會生活一面の精神的中心として來た。即ち氏族の集團生活には、氏神の神社が中心視せられて居たのである。

然るに、文化の進展は、氏族集團の生活をして異分子混交集團の生活状態に變改せしめた。この場合においても、從來奉齋して居た氏神は、その地方の精神的中心として禮拜せられたであらうが、また新しく移住した氏族が其の氏神とする神靈を別に社殿を造つて奉齋するに至つたであらう。更に有り得る事として考へられるのは、異分子混交集團が協議して、その地方の事情に適合する神靈を迎へ祭るに至つたらうといふことである。かうなると、地方々々に祭られて居る神は、氏神たる性質が薄くなつて、單に其の地方に鎮座せられ、その地方を守り給ふ神靈といふことの方が濃厚になつて來るものである。即ち地方に鎮座せられ、地方を守り給ひ、地方人に平和と幸福とを授け給ふ守護神として崇められ給ふ神が、いはゆる鎮守神である。鎮守神の地方人から崇敬せられ給ふことは、氏神の氏子における場合と同じであつて、多くは之を氏神と稱へ、この鎮守神の神社を禮拜し支持する關係區域内に住する者を氏子と稱へて居るのは、眼前の事實である。

この鎮守神は、古くは「産土神」と書いて、「うぶすながみ」と稱へたのである。「うぶすな」といふのは、「産砂」の意義だとせられて居るが、『日本書紀』の推古天皇三十二年の條には「本居」といふ字を此の語に充てられて居り、『三代實錄』の清和天皇貞觀六年の條には讃岐國宇夫志那神の事が見え、「延喜式」の神名式尾張國の條には宇夫須那神社といふ名が出て居り、この宇夫須那神社は現に尾張國栗栗郡栗栗村大字島に鎮座する村社である。これらによつて見れば、各自が生誕し居住する土地を「うぶすな」といふのが適當なので、各自の居住する土地の神は「うぶすな

がみ」と稱へ奉るべきものである。「鎮守の神」、「鎮守の森」など稱へるのは、後世に始まつたのである。

産土神の印象——我が國においては、大都市に結構壯麗なる神社が鎮座せられるのは勿論で、山間僻地でも、津々浦々でも村落のある處には大小の神社が鎮座せられる。各地に旅行する者が諸所で拜見するのは、神明さま、天祖さま、稻荷さま、八幡さま、春日さま、天神さまなどの社で、そのほか祭神は明かに知りたけれども、杉や檜や樅や楓や櫻など閑静な森林がある處には、多くは村社、無格社などが祭られて居る。殊に一きは目に立つのは、郷社、府縣社で、それらは規模が大きく造營せられて居る。某藩祖の神社、別格官幣社、大中小の官國幣社に至つては、これを参拜することが、多くの場合において、旅行者の目的の一として加へられて居るものである。

これらの氏神さま、鎮守さまは、まづ氏子とか地方人とかに何時とはなしに深刻なる印象を與へ給ふ。日本精神の傳統を有して居る家庭に於いては、この氏神さま、鎮守さまのお札を受け、神棚にませまつりて、朝毎に拜禮する。拜禮の形式や、神拜の詞を能く心得て居る人は少いかも知れぬが、恭しくお辭儀したり、拍手したりはする。子供が生れると、幾日目かにお宮詣りをする。春秋などの祭禮には、一家の主人は言ふに及ばず、家族の者も参拜する。農業地方では、日早つゞきの頃に雨乞踊をすることがある。秋の豊作が見越される時節には豊年踊をすることがある。神社に聳える高く大きな森は、氏子の者たちに幽邃森嚴の感を與へるのみならず、遠方から郷里を望む時の懐かしい目標にさへなるのである。また一の郷土が一の神社を有するといふことは、郷土人の自尊心からも熱烈に要求せられることである。かくの如く郷土人と産土神との關係は頗る緊密である。

三、祭禮と情操教育

形勝地における神事の崇高美——山嶽丘陵など、すべて高燥な土地は、登るのに幾分の苦しみを感ずるかはりに、登りつめると、その氣分を晴れやかならしめる。殊に其の高燥なところに緑の滴らうとする老杉古松などの常緑樹が亭々と聳えて居るあたりは、おのづから人をして森嚴幽邃の趣を味ふに至らしめるものである。我が國の神社は大抵かかる森嚴幽邃の境に鎮座あらせられる。この境内に差し入らうとする時、鳥居をくぐつて歩を進めれば、青葉の間より吹き来る清涼な風が浮世の俗塵を拂ひ落す心地がせられ、胸間の爽やかなのを覚えるのである。緑の隧道の奥はるかに社殿の見奉られるのも尊く、神明造か、權現造か、春日造か、千木ちぎ木きの古樸なものも有り難い。神官神職の衣冠もいかめしく、奏上する祝詞もほがらかである。

平常は閑静の境たる神社も、祭禮の執り行はれる當日には、前の夜より何となく異なる氣分が境内附近に漂うて居る。その日の朝は未明から小鳥の聲までが頼もしげに聞える。この祭禮といふ事は、古より何れの神社にも恒例と臨時とがあつて、新年祭、月並祭、神嘗祭、新嘗祭などは恒例、國家又は其の神社鎮座地方に何か大事の生じた時に行はれるのは臨時の祭禮であるが、その社々に謂はゆる本祭といふことが年々一回行はれるところもあり、春秋二回行はれるところもありて、何月何日と定まつて居る。十年目とか十二年目とかに大祭が盛に行はれる慣例のところもある。伊勢の遷宮は二十年目毎に行はれて、盛大な祭式が行はれる。

祭禮で古より著名なのは、加茂の葵祭、稻荷の勅裁祭、春日の申祭、住吉の卯之葉神事、香取の軍神祭、鹿島の常

陸帯神事、熱田のベロ／＼祭、日吉の午神事、建部の船幸神事、八坂の祇園會、諏訪の御柱祭、赤間の先帝祭、嚴島の鳥廻祭、出雲の花祭、金刀比羅の祝舎神事、太宰府のウツ替神事、筑摩の鍋祭、江戸の山王祭、神田祭、淺草祭など、その神事祭式の敬虔・莊重・典雅・雄麗を超えて、妖婉怪奇にさへ渡るものがある。

祭禮の風俗的觀察——我が國の地方々々に神社があつて、その神社々々に祭禮が行はれて来たことの久しいのは、我が國の一特徴である。祭禮といふと、嚴肅に聞えるが、お祭といへば、親しみのある言葉に聞える。年々にお祭のある季節は、その地方民の待ち遠しく感じて居る日である。お祭の儀式も神社によつて相異なるものであるが、そのお祭當日における風俗習慣といふものにも地方々々の特色がある。

神前に参拜する都市村落の人々は、それ／＼盛装して悠々と押しかける。御輿の渡御、出し車、假裝行列などある神社に於いては、これを拜觀する群衆が殊に雜沓する。それを當て込んで物資の露店などが街道の兩側を賑はす。酒氣に乗じて大言壯語するもの、蹠蹠として千鳥足を踏むものさへある。この日各民家に於いても、酒肴を用意して隣町村の親戚故舊を招くこともある。御輿や、行列の通過する路筋に沿うて居る家々には、座敷に金銀の屏風を立て列ね、生花を生けて置くなども、地方民の嗜ある生活ぶりを想はせる。境内又は路傍には興行の見せ物などが小屋掛をなし、とり／＼の看板を掲げ、聲張り掲げて觀客を招く。夜宮など行はれるところでは、殊に参拜かた／＼見物し歩く男女が深更まで漫歩を恣にして居る。こゝに古歌にあらはれたる祭禮を一瞥すれば、

おそくとく宿を出でつつ稻荷坂のばればぐたる都人かな
源 兼昌
駒なべて三笠の山邊ゆく人はあめの下祈る使なりけり
源 兼昌

葵草かざり車のけしきまでけふは殊なる物見とぞ聞く

藤原爲家

また俳諧人の眼に映じたものにも、
箕の蒔繪まぎるる葵かな
乙 由
神田から秋の錦の紅葉かな
蓼 太
日吉祭衆徒や生きたる太平記
湖 春
もの言はで著るや筑摩の鍋二つ
成 美

といふやうに、祭禮の風俗を窺ふに足るものがある。かくの如く祭禮に現はれる風俗は、その時勢の盛衰が反映するのは勿論であるけれども、神事に對して、殊に感激し興奮する國民性は、祭禮風俗の上には、民力以上に濃厚なる發露を示して、日本の情操を培養して居るのである。

祭禮の藝術的觀察——天照大神が天之岩屋に隠れ給うた時、その岩戸の前に八十萬の神たちが相集まつて協議し給うた結果、諸神が部署を定めて祈禱を行はれた神事は、綜合藝術的な演劇的仕組で、さすがに天照大神の神慮を和げ慰め奉つたやうである。この神事を始として、その後神武天皇が靈時を大和の鳥見の山中で執り行はせ給うた神事の如きも、いづれも祭禮の起源をなすものであつて、これを藝術的に觀察すれば、敬虔な中に幽玄であり、優雅な情趣を含むものであることが感ぜられるのである。更に後世となるにつれて、社殿の建築美が發達し、祭典に當る齋員の服飾美も進み、齋場は森嚴に、祭儀に用ひられる歌舞音楽の類も莊重にして優美を加へて來た。しかし、いつしか神樂の歌も催馬樂の類も、さほど高雅なものではなく、殊に里神樂には頗る卑俗なものが行はれて來たのを見る。これ

らに對しては、新に歌曲も脚本も優麗にして今日の國民生活と縁遠からぬものを工夫せずばなるまい。

祭禮の歴史的觀察——祭禮は祭神に對する追懷・謝恩・禮敬のために行はれる至情の儀式的な表現である。これらの行爲は人類固有の情念から發するもので、最も自然的な表現であるけれども、人類社會の眞正な進歩を欲するに於いては、ます／＼祭禮の重要であることを認めなければならぬ。その我が國で行はれた起源は神代にあるが、幾變化して今日に及んだのである。祭禮の形式は神社により祭神により土地によつて相異なるが、永い時代の間には盛衰を免れなかつた。殊に神社と佛寺との接觸した思想混淆時代に於いては、その思想の高潮時代に到つて、變態的に發達したこともあつた。あまり祭禮日に奢侈贅澤して弊害が多いといふので、禁制を出されたこともあり、また徳川家齊將軍の頃であつたが、江戸深川八幡宮の祭禮に氏子の町々から踊や練物を盛に出して大騒ぎしたので、これを見物しようとする群衆が永代橋を踏み崩し、川に落ちて水層となつたものが千五百人も生じたこともある。更に言へば、喧嘩祭として、鎮守神の祭禮毎に氏子同士が喧嘩をするのが例となり、多數の怪我人を出すところもあると聞く。祭禮に當つて斯かる不祥事を演出するが如きは、いかにも不敬至極な事である。けれども、是みな故意に企てることではなく、あまり神事に熱中するのによつて起る不注意な出来事である。さればとて、かくの如きは放任して置かれる事柄ではないから、地方人心の訓育に當る者は相警める所がなければならぬ。

祭禮の地方人心に及ぼす影響——いづれの地方でも年中行事といふものがある。けれども、恒例として執り行はれる年中行事の中では、鎮守の神の祭禮ほど一般的な重大事はない。新年の祝賀は官公衙や學校でも式が行はれ、また四大節の儀式は小中學校では缺かさず行はれるが、總じて簡素で淡泊である。佛法信仰の盛な地方では、數日に亙つ

て報恩講とか、お會式とか云ふことが、賑やかに行はれる處もある。これらを外にしては、臨時の行事として、官公衙の新築落成式、道路開通式、架橋渡初式、偉人追悼式、功勞者表彰式などが執り行はれることもあらう。それにしても、鎮守の神の祭禮は、如何なる地方にも年々執り行はれるばかりでなく、すべての家々でも一日の業を休み、珍しい飲食物をも用意し、親子が手を引いて神前に參拜するなど、嬉々たる和樂の狀は、當日を賑はし、前日から待ち焦れられ、後日にも追懷の種を蒔いて、常に腦裡の花と咲くのである。それ故に祭禮の人心に及ぼす影響の大なるに心づいて居る者は、能く地方人の敬神思想を啓培し、祭禮などの機會を利用して、人心を高雅に導き、風俗の卑野を匡正するやうに深く注意すべきである。

四、祭神と道德教育

祭神の尊嚴——神を祭ることは、人世の一大事象である。その祭られる神の如何によつて、或は一神教的となり、或は二神教的となり、或は多神教的となり、或は汎神教的となり、或は自然神教的となり、また或は人間神教的となる。我が國で祭られて居る神にも、天地創造の神があり、生々化育の神があり、人界建業の神があり、中にも人としての文化的事蹟が歴史上に顯著なものが多數を占めて居るのは、我が國民信仰界の特徴である。

我が國におけるこれら諸の神は、齊しく其の威靈の尊嚴を認められ、その惠澤を拜謝せられるのによつて、永く神社の祭神として尊崇せられて居るのである。その人としての歴史的事蹟が顯著な功勞者であつても、その一旦之を神社の祭神として仰ぐに至つては、たゞに一代の偉大な恩徳と恩澤とを追慕感謝するばかりでなく、その神靈の稜威

は現世を永く照鑑し守護し給ふものとして、衷心から之を尊信し奉るのである。

祭神の功勞——天地創造の神や、生々化育の神といふものは、これに對する人の心々によつて、尊信に差異ある道理であるが、我が國史に歴然たる地位を占めて居る人にして神と崇められるに至つたもの、殊に別格官幣社に祭られて居る神々は、生前における業績の性質種類は區々にして複雑である。その業績の性質種類は區々であつても、その畢生の事業が一世を裨益し、永く後昆に記念せられる價値に富んだ模範的なものたるべきは、言ふを待たぬところである。

かゝる功勞者の中にも、一村一郡の水害を治めた者、水利を興した者、開墾に力を盡した者、一町村の治績を擧げた者、慈善事業を創成した者、一藩の始祖たる者、藩政に忠誠を挺てた者などで、その事績は廣く天下を潤澤する程には至らなかつたにせよ、その近郷近在をして感謝の涙を注がしめた者ならば、一地方に神として祭られる資格が十分であらう。けれども、國家の難局に當つて否運を轉回し、億兆の民をして安寧幸福に謳歌せしめた者、又は深遠な學理を研鑽し人力未到の境地を開發して一世の文教を開進し、時代を更始一新せしめるに至るが如き者にして、初めて正に國家國民の全般から神としての尊崇を受ける筈の者である。

祭神の神人的優越性——同じく人と生れても、人にして獸にも劣るが如き者があり、何等の異彩を放ち得ずして六十年七十年の此の世を醉生夢死する者があり、生きながら神の如く尊ばれ崇められて一生涯を玉成する者もある。この一生涯を玉成する人に至つては、素より天稟の才能あることもあらうが、ある一事に感奮興起し、忽ち着眼を高くし、修養を積んで、初一念を貫かうとする意志が堅確に、千辛萬苦にも能く堪へて、時間を惜み、倦まず怠らず、勇

往邁進する熱成を有する者でなければならぬ。かゝる人は、自己完成の功名心に燃えても居り、また時には自己を忘れて犠牲的精神の驅使に甘んじ、おのづから超人的行爲を敢てして、人か神かも見分けがたい程の域に達せなければ止まない。これ即ち神人合一の人で、生きては非常の事を成し、死んでは世を護り人を導く神と祭られるのである。かくの如き英傑を祭つた神社の大前に類けば、その凛然たる風姿は髣髴として眼のあたりに現れ來り、何等かの啓示を與へ給ふ心地がせられるのである。

神社参拜と歴史に關する知識——西行は奇行の多かつた傑僧である。この西行が伊勢の大神宮に参拜した時の歌と言ひ傳へられて居るものに、

何事のおはしますかは知らねどもかたじけなきになみだこぼるる

といふ一首がある。なるほど、伊勢に参つて、宇治橋を渡り、いよ／＼神域に歩を進める時は、神の威靈が身にしみ胸に塞つて、宏大なる徳光に覆はれるを覺えるのである。この事は、必しも伊勢の大神宮のみに限つてのことではない。稜威輝く神社に参れば、いつも此の感激に打たれぬことはないのである。

神代又は上代における傳説により、史的事績によつて永久に祭祀せられて居る神社の祭神には、後人の受けて居る印象の深刻なものと、さほどでないものがある。その祭神の神徳又は業績の顯著な神社、その縁起や由緒の明かな神社に對しては、崇敬の情が濃厚で熱烈である。神社祭神に關する事は宗教的信仰的であるとは言ひながらも、我が國における祭神は大抵みな歴史的偉人の英靈を祭つたものであるから、その祭神の神徳又は業績が史學的に明瞭を加へるに隨つて、追懷尊崇の情も増してゆく筈である。それ故に、氏子又は崇敬者をして祭神に關する歴史的知識が正確であ

らしめることは、大に緊要なことである。私が國家の本質上から觀て、國史上の知識が進歩し普及することは、日本精神や國民道徳の思想を鼓吹することになるのである。殊に祭神と仰がれ給ふ人の業績を明かにし、性格を能く知ることは、國民思想を道徳的に誘導することになるのであるから、祭神に關する著述や講演は歓迎すべきものである。

祭神の崇高な徳性は、その神社に参拜し、その祭神を崇敬する者の性情に深大な感化を及ぼすことは疑ない。それで、現に我が國の各地には到るところ神社が鎮座あらせられるに至つた。内地ばかりでなく、朝鮮にも、臺灣にも、滿洲にも、南洋委任統治領にも、又は南米ブラジルにさへ、日本人の集團的に住居する處には、大小の差こそあれ、大抵みな神社の設けられて居らぬことはない。その各地にその祭神を奉齋するに至つた所以を考究して見る必要がある。例へば、大和國に大神神社の奉齋せられて居る由來は如何に、鎌倉に鶴岡八幡宮を勸請した事情は如何に、武藏國に氷川神宮を一宮として祭られて居る理由は如何に、臺灣神社の祭神は何神であらせられるか、樺太神社には何神を祭られてあるかなどを知る時は、その祭神の神威赫々として其の土地を照鑑し給ふいはれも思ひ合せられるであらう。

別格官幣社に至つては、祭神と其の奉齋せられて居られる土地との關係を知つてこそ、いよ／＼神徳の高きを感じるものである。談山神社の藤原鎌足における、護王神社の和氣清麿における、小御門神社の藤原師賢における、湊川神社の楠正成における、阿部野神社の北畠親房父子におけるなど、その祭神に對する歴史的知識を缺いて居るやうでは、神威の尊さも臆げたるを免れぬのである。

更に言へば、その地方出身者の英靈を祭つてある神社に對して、もしも其の祭神と土地との關係を知ることがな

つたならば、その靈驗のあらたかさも頗る滅殺せられることは多言するまでもない。大政治家にせよ、聖人賢人にせよ、武勳者にせよ、志士仁人にせよ、その誕生地において神と祭られるが如きは、その祭られる者の徳望たるのみではなく、これを祭る郷土の大なる誇として、後々の郷人を感じ興起せしめる強力な刺戟である。この點から觀て、神社の祭神は我が民族的國家的道徳教育の標識である。

五、學校教師と神社参拜

教育の理想は人を神にするに在り——郷土の子女が神社に参拜するのは、單に綠樹蒼鬱たる清境に心氣を爽快ならしめるだけでも、大に有意義な行動である。人は五百年も千年も物舊りたる老松古杉の下にたゞすむ時、種々な感想を起す。殊に木の間には小鳥が好い音で歌ひ、池の中には眞鯉緋鯉が潑刺として遊び戯れて居るなど、見るもの聞くものが和樂の情をそそのるのであるから、花散つて葉櫻の下風清らなる頃、常磐木と紅葉とが錦を織りなす頃、子女を神苑に導くのは、子女の心頭に神を現れしめるのである。

まして、氏神たる、産土神たる秋の宮居に額づいて、聲うるはしく神拜の歌を齊唱した後、祭神の業績を叙し、神徳の雄大なるを説き聞かせなどするならば、我が國の神が決して空想虚誕のものではなくして、今日の國運を造り上げ、今日の文化を造り成した偉勳者の神なることを幼い者の心理にも能く領解し得るであらう。人には悉く神性である。この神性を機會ある毎に發揮せしめるやうに導くのが眞の教育である。すなはち教育の理想は人を神に化せしめるに在るのである。

教育者の敬神思想——宇宙善化の運動に参加するのが眞の人である。人をして宇宙善化の運動に参加せしめる作用が教育である。人をして宇宙善化の運動に参加せしめる作用のために努力するのが教育者である。この見地から言へば、教育者の任務は、旺盛なる神性の最も濃厚に發揮せられた場合に全うせられるものである。

教育者は單に事物を子弟に説明するのみに止まつてはならない。教育者は宇宙善化運動の使命に任ずる權化でなくてはならない。教育者は此の宇宙善化運動の使命を靈感によつて感受する所がなくてはならない。この使命に對して敬虔なる態度を操持する教育者にして、初めて子弟を眞に教化薰陶することが出来るのである。教育者には敬神の思想が涵養せられて居らなければならぬ。

この信念の下に、學校内の一室には神棚が設け置かれるであらうし、時によつて生徒を引率して神社に参拜することあるに至るであらう。西洋の國々では教育と宗教とを切り離してしまつた處もあるけれども、我が國では教育と敬神とを切り離すことは永久に出来ない。わが國において敬神尊皇は一種獨特の信念に基づいて居るもので、外國に類例を見ない國家的特性といふべきものである。

實物教育主義と郷土における神社参拜——教育は學校の教室内ばかりで完全に行はれるものではない。教室以外のところに補助を求めても、教育者が此の補助地の利用を能くせねば、効果は薄くなりがちである。學校の生徒を野外に連れ出して、田圃の耕作法を説明し、作物の植付刈取法を目撃せしめ、牛馬羊豚の飼育法を聴取せしめ、或は海岸に誘うて、海洋の渺漠たるを見はるかす、船舶の航行を観察せしめ、漁村漁民の生活に親しませるのもよい。けれども、また去つて山麓密樹の間に郷土出身の英傑が神社の祭神となつて居る前に頼づかしめ、その生前の偉業を物語つ

て聽かしめるなども更によい。

この神社は、無格社か、村社か、郷社か、府縣社か、別格官幣社か。祭神は軍人か、政治家か、文藝家か、産業家か。またそれが如何にして地方のために寄與する所が多かつたのか、國家のために貢獻する所が大きかつたのか、その犠牲的精神が如何に熱烈であつたかなどを物語つて聽かせる中に、或一點偉大なる感激を波立たせるところもあつて、これを聽いた者の一生に強い指針たり得ることもあらう。かくの如きは、かの實物教育主義を最も有効に應用するものと云ふべきである。

墳墓参訪と神社参拜——草深い田舎の僻地に先賢の生家を訪ね、苔の路を辿つて古哲の墳墓を弔へば、その先賢古哲に對する平生からの渴仰を醫するに足るものがある。その簡素な住宅、その振はぬ子孫の生活状態は飽かぬところも感ぜられぬではないけれども、かゝる田舎が偉人を生んだものと思へば、却つて追懐願望に堪へないのである。けれども、墳墓に香花を手向け、寺僧をして誦經せしめるが如きは、何となく憂愁の中に陥る感が伴ふを免れない。

それに引きかへて、偉人を祭神とする神社に参拜すれば、たとひ社殿の規模は大きからぬにしても、境内に古木の昔を語るものは少いにしても、祭神が人として活躍した英姿も想ひやられ、後人を激勵指導する威靈の嚴かなるを覺えるものである。

それであるから、學校授業の補助として行ふ遠足行軍の途上における名所舊跡往訪には、死者の安らかに眠つて居る墳墓におけるよりも、祭神の明らかに照鑑あらせられる神社に参拜せしめる方が、士氣を鼓舞する點において、大に勝る所があると思はれる。學校教師が花、紅葉につけて生徒に校外教育をするのにも、よく場所を選ばなければな

六、神官神職と郷土教育

神官神職の郷土研究——近來郷土の研究といふことが漸く盛になつて來た。その研究せられる方面は廣く、研究の對象は種々雜多であるが、この事業に最も多く力を添へてよい者を神官神職とする。殊に累代社家として、その地方に永住して居る神職の家に生れたものは、その地方の舊家たる責任としても、その地方に伏在する文化資料を探索して、郷土教育の發達に貢獻する所がなければならぬ。

神官神職が神に奉仕するの餘暇を以て郷土研究に努力するとして、最も多く力を注ぐべきことは、古蹟の探訪、古偉人の顯彰、古文書の調査、古傳説の集輯、古語、古謡の蒐集解釋などである。すべて古代文化に關する資料を發見し、これを現代學問の形式によつて社會に發表するのは、神官神職の學問素養の上から、地方的地位の上から、最も便利にして功を建て易いものと思はれるのである。

神官神職の地方産業着眼——現代の社會組織においては、地方産業の發展を計り統制を司るのに、その職責を負うて居る當面の人があるので、神官神職はかゝる社會的事象に携はる必要がないと言はば言はれようけれども、こゝにはやはり神官神職の地方産業上に視線を注ぐべきことを強調したいと思ふ。神社の祭神には伊勢の兩大神宮をはじめ産業に關する神が少くはない。各地方における平和的發展と住民の安寧幸福とを期圖するには、地方の事情に適應する産業の發達に最も重きを置くより外はないのである。それ故に、農業地方ならば、農業に關する神と氏神とを祭

り、工業地方であるならば工業に關する神と氏神とを祭り、商業地方ならば商業に關する神と氏神とを祭り、漁業地方ならば漁業に縁ある神と氏神とを祭り、また各業の開祖を祭り、功勞者を祭る勳議を提唱するがよい。

神道の事には保守の方面もあるけれども、進取の方面もあることを忘れてはならぬ。神官神職にして産業の發展を祈り、産業神の威徳を讃仰し、産業功勞者の惠澤を稱揚しようといふ勸業的勳議を提起するならば、地方の股脈を欲する者は、誰か之に反對する者があらう。地方住民はかならず相率ゐて其の議に賛し、産業界に一段の活氣を加へるに至るであらう。

神官神職と地方教育——神官神職が學校教員を兼任するのも便宜な場合はあらう。けれども、それは蛇蜂取らずである。それよりも、神官神職は高處大處から郷土の指導開發に任ずるがよい。國民の思潮が混亂して居るやうな時代には、これを急に順當な筋へ引きかへさしめることが容易でないけれども、神官神職の如く體系づけられて居る精神生活の者が不斷に郷土教育に力を注いで居るならば、能く今後の國民思想の變潮に備へることが出来るであらう。

まづ其の地方に設置せられて居る各學校と縁を結んで、四大節とか、卒業入學とかの儀式に參列し、所信を披瀝すべき機會を造るがよい。青年團や少女團、母の會などにも參列し、辯論會などにも顔を出して、指導的に努力するがよい。神社に日曜學校や、子供の會などを設けることは、異論もないではあるまいけれども、穩健な方法を以てすれば、相當の效果を示し得ることは困難でもなからう。神社を中心に史談會とか老古會とかいふが如きものを設けて、年に幾回か、その地方における知識階級や古老の人々を招き集め、追憶談研究談を交換し、時に公開講演會などを催すのもよいと思はれる。

神官神職と鳥居を出ての活動——神官神職には國家の法令によつて指定せられて居る職分のあることは勿論である。それは嚴守せねばならぬ。しかしながら、その職分に餘暇ある時、郷土のために忠實を盡すのは決して咎められる筈の事ではあるまい。近來各府縣神職會が機關雜誌を發行し、また有數の大社務所が神道宣揚の目的を以てパンフレットを世間に頒布して居るが如きは、世情に適して居る事業である。

今日における世間は、神官神職が神祇に奉仕する餘裕を以て鳥居より外へ向つて活動することを要望して居る。技倆ある神官神職は、かゝる世態に鑑みて、社務所内に神道講演會を催すより外、進んで機會を造つて神道の宣揚に奔走すべきである。皇國の精神を研究し、これを現代の世態人情の上に斟酌し、自ら馬を陣頭に進めて社會に呼び懸けるのは必要である。また一世の名士を招聘して、氏子覺醒の大講演大講習を爲さしめるのも、郷土教育に力を致す一法であらう。このほか前項に縷述したるが如き大小の事業は、たゞ神官神職の活動を待つて居る状態である。今後の神官神職は決して昔の大官人の如く閑散な地位ではない。

七、官吏公吏の敬神思想

官吏公吏の社會的地位——官吏公吏は國家又は自治體の統制を任務とする者である。國家又は自治體の治績が、その之を組織して居る分子たる人民個々の人格的修養の如何に因ることは勿論であるけれども、優良なる治績を擧げる爲には、國家又は自治體を統制して居る者の人格的修養が更に崇高なるを要することは明かである。殊に國家の政務を擔任して居る者として、我が國家の特性に關する體認が必要であることも言ふに及ばない所である。

我が日本は、天祖の神勅によつて天壤無窮の國運が基礎づけられ、萬世一系の天津日嗣が永久に君臨せられ、皇祖天神を祀つて道徳思想の大系を示させられて居る以上、この國家に吏員たる者は、この國體を承知して居る筈であるけれども、信仰の上において、國體に相副はない立場に立つ者があるが如きは、最も遺憾である。即ち日本の官吏公吏たる者は、忠君愛國の精神に篤きのみでなく、敬神の思想に燃えて居る者でなくてはならぬのである。この信念なくして、我が國の官吏公吏たる者があるならば、それは謂はゆる獅子身中の蟲たるを免れない者であらう。個人主義にして利己的な心を胸中に藏して居る官吏公吏は、人の風上に置くことの出来ない蠢賊である。

官吏公吏の神社參拜——官幣社國幣社に奉齋せられて居る神は、多くは嘗て國家社會に至誠奉公の實績を奏した人で、やがて後の官吏公吏に模範を示して居るものと云ふべきである。官吏公吏たるものは其の氣障な官僚的態度を廢し、常に其の神前に禮拜して、奉公の實を擧げること誓ふべきである。

近年國務大臣を拜命した者が、拜命の後幾くならずして伊勢大神宮に參拜し、橿原神宮、明治神宮などに詣でて、大臣拜命を告げ奉るのは、一種の美風である。これを告げ奉る心の底に流れて居る水の色は相同じでないかも知れぬけれども、清淨なる心の泉から湧き出る至誠を以て拜命を告げ奉るならば、その政績を擧げて國民の信望を博し得られるやう神の感應があることは疑なからう。

國務大臣拜命を神前に告げ奉る美風は、國家全般の官吏公吏の上に及ぼしたいものである。府縣知事は府縣内の官國幣社に、又は府縣社に、市長村長は市町村内の郷社村社に拜命報告の參拜を爲すに至り、他の官吏公吏も之に準じて行ふに至るならば、かの忌まはしい瀆職事件の如き醜汚な悪行が何時となく絶滅し、おのづから生ずる過失罪も減少

することとならう。更に年頭にも祝日にも祭日にも神前に参拜して過誤なきを期するに至るならば、官僚界は恰も白日の下に青山を見るが如き明快なものとなつて、官吏公吏の威信は大に尊敬するに足るものがあらう。

行政的神社崇教と精神的神社崇教——官吏公吏の神社参拜が以上述べたやうな慣例となり、年毎の行政始に第一に神事を諮問するほどに至る時は、いはゆる祭政一致の實が擧るであらうけれども、それは行政的神社崇教と云ふべきものである。單に行政的神社崇教が天下一般に行はれても、信念より來たる精神上的の神社崇教が普及し、官吏公吏と神とが密接不離なものとなるに至らぬ中は、ほんの形式的な神社崇教に流れる憂がある。

思うて此の點に到る時は、我が國における政治學法律學などの中には敬神思想が織り込まれて居なければならぬ事が考へられる。我が國の最高學府で説かれる政治や法律の學説が、かの科學的にして抽象的なる近代の西洋學に標準を採られて居る間は、我が日本獨特の敬神思想を政治學説、法律學説に織り込まれることは特み難いことであるが、幸に今までの法學界にも敬神思想の旺盛せる學説を吐き來つた人も二三ある位であるから、今からは我が國獨自の見地に立つて斬新なる學説を旗幟鮮明に力説する人が續出するのを要する。この事は、我が國の政治史並に法律史を研究するならば、かならず思ひ半ばに過ぎるものがあらう。

神社行政が郷土に及ぼす影響——政府が神事に關する行政を最も先にするのは、我が國古來の特殊な慣例で、その起因に對しては、深く思ふ所がなければならぬ。今日におけるが如く神社が發展して、國家の大なる要素となつて居る事は、我が日本獨特の現象である。これが國民精神の上に大なる反映をもつことは言ふまでもない。

「大日本は神國なり」といふのは、我が祖先より傳へて來た信念である。それ故に、我が國の政治には、常に此の神

事を重大にして、神社の營繕を怠ることなく、神官神職に對する人事行政を慎み、官吏公吏の神社参拜を繁くするなど、すべて國家も市町村の自治團體も、神社崇教の模範を示せば、神社の鎮座ある郷土の住民はこの心を心として、神事を重んじ、神社を重んじ、神祇を崇め、神道を辨へ、美風良俗を馴致するに至るであらう。

かくの如きは、我が日本固有の傳統であるから、我が皇化の及ぶ處、朝鮮にも、臺灣にも、樺太にも、南洋委任統治領にも、また此の施設を擴大して、美風良俗の清潔な天地を造りひろめなければならぬ。

みな人の心も磨けちはやぶる神の鏡の曇る時なく
といふ御製は、爲政者の最も服膺すべきものである。

八、神社分布と民心統一

全國神社の數——その部落に神社が鎮座せられてあれば、その部落における住民は安堵し得られる。今我が國の市町村數をば、大正十二年末の統計に據つて見るのに、市の數は九十二、町の數は一千四百七十三、村の數は一萬五千三十六となつて居り、大小を顧慮せず之を合計すれば、一萬二千一百一といふ集團數になる。大字の數は無慮これに十倍するであらう。更に同じ頃の神社數を調べて見れば、伊勢の大神宮を別として、官幣大社は五十五、官幣中社は二十四、官幣小社は四、別格官幣社は二十三、國幣大社は五、國幣中社は四十七、國幣小社は二十五、府縣社は七百八十、郷社は三千四百七十四、村社は四萬五千二十九、無格社は六萬四千六百七十七となつて居り、これを無差別に合計すれば、十一萬四千八十四といふ神社數となる。この市町村數に神社數を比例して見れば、我が日本民族の生活

に神社の鎮座が如何に要求せられて居るかを察知することが出来る。
更に全国における神社の分布状態を一覽し易からしめるために、府縣別神社数の表を掲げよう。この表は大正十三
年末の統計に據つたものである。

社格	官國幣社	府縣社	郷社	村社	無格社	計
道府縣	4	14	64	67	117	186
東京	10	27	63	1010	1562	2710
京都	7	13	79	505	71	675
大阪	3	7	42	713	547	1312
神奈川	8	62	158	1893	2715	4835
兵庫	3	11	30	393	1083	1511
長崎	2	11	45	563	883	1300
新潟	2	18	23	1457	843	2340
埼玉	1	9	43	825	311	1300
群馬	2	18	23	1457	843	2340
千葉	4	14	79	1190	1301	2710
茨城	4	13	48	1554	1137	2756
栃木	4	10	48	1041	1110	2353
福島	4	10	41	1049	2933	4145
宮城	2	8	38	647	623	1310

社格	官國幣社	府縣社	郷社	村社	無格社	計
岩手	1	9	30	438	516	994
青森	1	10	55	693	49	808
北海道	2	7	56	148	435	648
秋田	1	17	37	558	711	1325
山形	5	33	97	1347	3219	5010
長野	3	23	73	1598	1695	3399
山梨	1	7	33	896	636	1613
岐阜	2	11	17	224	2803	5018
富山	1	10	36	247	743	2936
石川	4	30	70	1551	266	2936
福井	4	33	77	1266	330	1913
滋賀	3	33	77	1266	330	1913
静岡	8	22	68	920	888	1918
愛知	4	29	167	2569	1559	3530
三重	3	16	47	581	961	1559
和歌山	3	16	47	581	961	1559
奈良	10	33	151	1056	401	1515
鳥取	3	7	43	336	73	470
島根	7	13	57	1056	401	1515

向山	三	三	105	1109	3708	5049
廣島	二	六	26	949	4343	5326
山口	六	三	100	271	455	864
徳島	二	三	72	664	455	2746
香川	二	三	79	245	1005	2746
愛媛	一	二	101	706	285	3533
高知	一	三	110	706	511	1364
福岡	八	四	22	1256	314	4695
大分	三	一	113	1496	395	5576
佐賀	一	九	49	1341	71	225
熊本	四	八	59	310	169	198
宮崎	三	二	56	980	336	439
鹿児島	五	三	43	419	253	743
沖縄	一	一	1	444	103	165
計	120	125	340	4515	6008	11398

この表を一覽し來れば、如何なる地方に神社が多く建設せられて居るかを知らることが出来るけれども、もはや十餘年前に調査せられたものであるから、昇格や併合などのために現状とは僅少の差異が生じて居ることを免れない。この表を検討して居ると、種々な感想が湧き出て來る。誰にも疑問とせられる所は、無格社の數が過半數を占めて居るこ

とであらう。神社數の多寡によつて、その地方の敬神思想の厚薄を判ずるのは早計であるが、無格社の餘りに多いのは講究せなければならぬ一大問題であらうと思はれる。見すばらしい神社は神の稜威を傷ける。

全國神社の祭神——神社を崇敬するのは、その奉齋せられる祭神の威徳を感謝し崇敬するのである。されば、神社の祭神は明確でなければならぬ。各神社には祭神を明示して置くやうにせられたい。祭神を種別すれば、自然の威霊を祭られて居るのがあり、列聖をはじめ、國家社會に功績を建てた人傑の英靈の祭られて居るのがあり、随つて我が國における人傑のみには限らず、外國人でも我が國の歴史に關係深い人物を祭つたものもある。古く歸化した外國人の子孫が住んで居る部落では、外國系統の神を祭神として居るものもある。神佛の區別が判然としがたいやうな祭神もある。大體から觀るのに、大社の祭神は明確たり易いけれども、小社に至つては祭神を明確にせぬまゝに維持して來たのがある。

内務省藏版の『特選神名牒』は神社のことを調査する場合に必要な良書である。これに列載せられて居る全國神社に就いて檢べて見たのに、祭神の記されて居ないもの、または疑はしいものが一千社を下らないので、大に驚かされた。今日となつては最早いづれも明確にせられて居るだらうと推察せられるが、社殿があり、祭典も行はれて居る神社の形式が具へられて居るのに、祭神の定まつて居ないが如きは不都合であるから、それらは局に當つて居る者が一刻も早く處理せられるやうに切望せざるを得ない。もし調査しても祭神が明確を得ない場合には、天照大御神を勸請して奉齋するのが最も適當であらうと思はれる。神威赫々たる神社は一層尊く拜せられる。

全國神社の神官神職——神社の祭祀に奉仕する者が神官神職である。祭祀は神を崇敬する氏子なり崇敬者なりが行

ふ所の精神的行爲であるけれども、祭祀の儀式を掌る神官神職は、神と神を祭る者との仲介者として、神社に奉仕するのである。我が國では太古から神を祭祀したから、中臣といひ忌部といふ者などが専門に祭祀の官職に奉仕して居たのであるが、世が移り變るにつれて祭祀の官職にも沿革が行はれた。明治以後には、神官神職の制度が漸く整うて來た趣がある。

神社の數が段々と殖えて來て居るから、現在神官神職の人數も多い。現に神官といふべきものは伊勢の大神宮に奉仕して居る神職である。伊勢の大神宮には、祭主、大宮司、少宮司、禰宜、權禰宜、宮掌などがある。また熱田神宮、出雲大社、權原神宮、明治神宮などには宮司、權宮司、禰宜、主典がある。このほかの官幣社、國幣社には宮司、禰宜、主典があり、府縣社及び郷社の神職を社司といひ、村社の社掌といふ制度になつて居る。これら神官神職の人員を見るのに、大正十二年の統計に據れば、大神宮七十三、官幣大社二百六十七、官幣中社一百、官幣小社十四、別格官幣社八十六、國幣大社十九、國幣中社一百五十三、國幣小社六十三、府縣社一千九十九、郷社三千二百七十七、村社八千五百五十九、無格者八百八十、合計一萬四千五百九十となつて居る。この神官神職の數を前述の神社數に比例して見ると、神社經營の成績に就いて考察を下されるであらう。

神官神職を任用するには、古くは祭神の子孫又は縁故者より採り、父子累代の世襲で、社家などと稱へて、中には三四十世も相繼いで居る者もある。それで其の地方の舊家として相當に敬意を拂はれて居る向もないではない。然るに、世襲神職は職業的に安定を得て居るからか、緊張味を缺いて來る弊害も見える事がある。今では官國幣社以上には殆ど世襲を廢し、別に學問才識のある人物を選抜して任用せられることが多くなつたから、神官神職を養成する

のを目的の一にして居る學校も出來て居る。東京の國學院大學、伊勢の神宮皇學館の如きは、その例である。また試験制度によつて採用せられる道も開かれて居る。いづれにしても、神官神職となつて神明に奉仕しようとする者を造るのには、學問才識の優秀なばかりでなく、人格が十分に陶冶せられて居らなければならぬ。

神官神職は國家からも優遇せられて居る。社會からも種々重大なる期待を寄せられて居る。現に勅任官の待遇を受けて居る者さへ十數名に及んで居る。この信仰上において、道徳的見地において、互に一脈相通じて居る神官神職が神社に奉仕する餘力を以て、それ／＼郷土教育の發達に貢獻しようと思すならば、その結果は大に目を聳てしめるに足るものであらう。

郷土の特色と民心の統一——バナナの實が黄色な顔を出す地方もあれば、林檎の實が紅い頬に微笑む地方もあるのが、我が日本の實情である。その地方の開發に關心をもつ者は、各地の實情に鑑みて、或は教育のために、或は宗教の爲に、或は産業方面のために、或は社會事業のために、或は保健問題のために、各自が身になふ貢獻を志さなければならぬ。人と生れ、かゝる聖代の徳澤に浴しながら、單に自己一身一家の生活問題のみに没頭して醉生夢死するのは、實に申譯のない次第である。そこで、神社に奉仕する者は、祭神の心を以て心となし、その氏子のために、その崇敬者のために、その地方一般のために、出來るかぎり忠誠を捧げて、教化の花を咲かしめるがよい。東國に在る者は東國の特色を發揮せしめ、西國に在る者は西國の得意とする所を伸長せしめて、その地方々々の美果を結ばしめるならば、神を通して神官神職の至誠も喜ばれるであらうし、神官神職を通して祭神の威徳も有りがたがられるであらう。

神社の宮殿を拜するのに、神明造もあれば正殿造もあり、八幡造もあれば春日造もあり、住吉造もあれば権現造もあり、浅間造もあり、八棟造もあり、流造もあるやうに、建築様式が相異なるけれども、神社は神社であつて、かの寺院と同様ではない。社殿には社殿としての統制がある。甲の社と乙の社との祭神は相異なるけれども、かの佛といふものと同様ではない。神には神としての共通性がある。各地における神社を中心に教育的な文化運動を起したならば、その現れる姿は朝紅暮白であらうけれども、神社人の經營する所には、かならず一脈相通する所あるべきは疑を容れない。そこには内務省といふものがあつて統制に怠らないであらう。

神道は冷靜なやうで熱烈である。皇道は寛大なやうで洩らすところはない。神道はやがて皇道となつて流露する。神社人が皇道の精神を以て東西に南北に新しい活動をはじめるとき、東西南北の情調は蓋し其の揆を一にするものがあらう。私は常に神社人の活動性が盛であらうことを祈る。(終)

昭和九年九月十二日印刷 日本宗教叢書
昭和九年九月五日發行 第九回配本

不許複製

東京市神田區一ツ橋通町二
會社發行 株式東方書院
會社印人 三井品史

東京市小石川區入船町一〇八
印刷所 共同印刷株式會社
代製者 君島 源

發行所 株式東方書院

電話九段 三八四二
印刷部東京 六八六一二

終